

冒険企画局

原著 岡本健太郎

さがら梨々



新書 × ゲームブック

今話題の無人島 JK サバイバルマンガ

だから楽しい
ためになる

「ソウナンですか？」に学ぶ
ゲームブック式 生死を分ける
最強のサバイバル術

岡本健太郎によるコラム、さがら梨々描き下ろしイラスト収録!!

星海社

「ソウナンですか？」に学ぶ
ゲームブック式 生死を分ける最強のサバイバル術

冒険企画局＋岡本健太郎・さがら梨々

155



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

朝スマートフォンに起こしてもらい、スケジュールを確認し自分が乗る電車の到着時刻や1日の消費カロリーまでも教えてもらえる生活に慣れきってしまっていると、ふと自分たちが生き物であるということを忘れそうになる瞬間があります。

しかし自然の中に身を置くとそれがどういう状況であれ頼りになるのは自分の身体と頭だけです。ぼくたちはただの地球上の1匹の生物でしかなくて転べば傷つくし動けば喉も渴くし腹も減るということを思い出します。

別に現代人にネイチャーな説教をしたり警告を鳴らしたりするつもりはありません。思えばぼくはアウトドアを自分の身体を使ったゲームだと捉えているふしがあります。体力がゼロにならないように気をつかい、食べ物をゲットし、治療し、眠ったり移動したりしながら体力とアイテムと知識とアイデアで目標を達成する。その単純さが楽しいのです。

たまに怪我をしたりひどく辛い思いをしたりもしますが、そういう失敗話を後からみんな

に話したりできるしいい思い出になる。体験こそが素晴らしい人生の宝物だと思うのです。

それなら逆に彼女たちの体験を楽しみながらゲームにしてみてもどうでしょうか。

みなさんは彼女たちと一緒に冒険し空腹を感じ夜の闇に怯えるのです。成功や失敗を繰り返しながら彼女たちとソウナン生活を生き延びてみてください。その体験が今後あなたの人
生にひとつでも役立つことがあれば素晴らしいことだと思います。

『ソウナンですか?』 原作者 岡本健太郎

とある高校の修学旅行。機体の一部が空中で破損する事故が起こった。機体バランスを失った飛行機は海面スレスレを飛行中、機体から投げ出された生徒がいた。



鬼島ほまれ

強く育ってほしいという元外人部隊の父親の想いを受け、どういう状況でも生き延びられる技術と知識と経験を学びながら育った少女。



鈴森明日香

天真爛漫なスポーツ少女。自慢は足の速さとEカップ。スポーツは好きだがアウトドアが得意というわけではないピピリ。



天谷睦

成績優秀なメガネっこ。真面目でしっかりものだが自分の部屋には家族にも秘密の蔵書がある隠れオタク。



九条紫音

生まれながらに銀のスプーンを咥えていたお嬢様。恥じらいと清潔感をモットーに生きてきた。

目次

はじめに 文・岡本健太郎 3

第1章

はじめての食料確保

鈴森明日香 9

第2章

森で迷子になったら

九条紫音 57

第

3

章

島を探索しよう

天谷睦

105

第

4

章

動物を狩って肉を食べよう！

鬼島ほまれ

151

おわりに

199



あ…あなた
恥ずかしく
ないの…？

アスカさん
サボって
何やってるん

うぐっ…!?
そんな目で見る

助

はいはいはい!!

あたしも行く
手伝うよ!!

第

1

章

はじめての食料確保

鈴森明日香
篇

プロローグ

乗っていた飛行機が急にガタガタとすごい音をたて高度が下がったと思うと座席ごと海に投げ出されていた。自分が海に沈んでいるのに気付いて必死で座席のベルトを外し海面へ顔をだした。奇跡的にも、大きな怪我をせずに助かったようだ。座席が着水のショックを和らげたのかもしれない。

前を向いても後ろを向いても見渡す限り海が広がっている。

すずもりあすか
鈴森明日香が立っているのは、海に浮かぶ飛行機の破片。



どういわけだか海に浮いている機体の破片は心もとないが、広い海に放り出されるよりはずっとマシだ。周りには、同じように海に投げ出された同じ学校の生徒がいた。同じように助かったらしい。

破片の上に3人でいるとまたひとり女の子を見つけた。

飛行機の残骸にしがみついているが、気絶しているようだ。

つかまっている飛行機のはねは、いつ沈んでもおかしくない。

このまま放っておいたら、波にさらわれてしまう……。

「助けなきゃですね……」

「生きているといいけど」

仲間が、そう言っている。

こっちの破片に乗せよう！

助けた女子は、妙なことに詳しかった。

トビウオの血を絞って飲んでるし、こんな状況でも堂々としている。

彼女が言うには、陸地が近いらしい。
それなら、助けが来るかもしれない！

結局、日が落ちるまで待っていても、救助は来なかった。
少し、横になった。

かなり疲れていたから、すぐに眠れた。

目を覚ますと、陸地が見えた。

「離れていつてるな」

サバイバルに詳しい女子が、そう言っている。マジかよ!?
今ならまだ300メートルも泳げば、上陸できると言われる。
仕方ない。泳ぐしかないか……。

泳ぎ始めて、しばらく経つ。

運動部のあたしはいいけど、他のやつは大丈夫か？
そう思って、後ろを振り返ると……。

あれ……、は……。

サ……サメだろ!?

サバイバルに詳しい女子の機転もあって、サメから逃げ切るこ
とができ、無事島にたどり着くことができた。

息も絶え絶えの鈴森明日香は、周辺を確かめる。
嫌な考えが頭をよぎる。

「ここってさ……。無人島じゃねえか？」

あたしは口にした。

その答えが合っているのなら……。

「海から見て建造物や道路は見えなかったからね。無人島だろう」
サバイバルに詳しい女子がその疑問を肯定した。

つまり、島に上陸すれば助かるという希望は潰えたということ。
状況は好転してない!



島についた鈴森明日香たちは、ひとまず状況を確認していた。

飛行機が墜落してから、1日くらい経っただろうか？

水を飲みたいけど、周りには海水しかない。

食べ物になりそうなものは、この辺りにあるだろうか？

体は休憩を求めているけど、今休んでもいいのかわからない。

助けが来るわけではない。自分たちで何とかしなければいけない。

頼れるのは、仲間だけだ。

まずは、自己紹介をした。

あたし、鈴森明日香。クラスはC組。バスケット部で陸上部も掛け持ちをしている！

お嬢様っぽいのは、B組の九条くじょう紫音しおん。

メガネをかけているのは、A組の天谷睦あまたにむつ。

そして、F組の鬼島おにしまほまれ。ほまれの、初めての遭難というわけではないらしい。

その遭難のプロフェッショナルの鬼島さんとやらに、話を聞くことにした。

「まずは飲み水の確保だな」

彼女は3つの指を立てた。

「サバイバルには3の法則というものがあるんだ」

A. 人は適切な体温が維持できなければ3時間で死ぬ。

B. 人は水なしでは3日間しか生きられない。

C. 食料なしだと3週間で死ぬ。

D. 三つ叉またの槍でがんばる。

「このうち、1つだけ間違っているものがある。君は、正しいのはどれだと思う?」
えっと、あたし!? 正しいものを1つ選ばいいんだよな……?

↓ **A** が正しいと思うなら、**2** に進む

↓ **B** が正しいと思うなら、**2** に進む

↓ **C** が正しいと思うなら、**2** に進む

↓ **D** が正しいと思うなら、**3** に進む

「そうだ。体温、水、食料。すべてが大切で、3の法則に従わなければ死ぬ」

体温は、今は大丈夫。……だと思ふ。

水と食料が大事なのはわかる。今、飢えてい
るし。

特に、睡は脱水症状を起こしているらしく、
体調が悪そうだ。

「さっき言っていたよな。飲み水の確保って」
今度はほまれが頷いた。
うなず

↓ 4に進む



」3の法則…適切な体温が守られなければ3時間、水がなければ3日間、食料なしでは3週間しか生きられない……というのがサバイバルと言われるところの3の法則だ。人をつかって実験はできないので実際のこの時間生きられるのかは科学的とは言えないらしいが、このタイムリミットよりは早く行動不能になると言われている。解決すべき優先順位を決めるひとつの目安になるだろう。

そうだ。あたしは何でも体力で乗り切ってきた。

少々無理めの受験勉強も、きつい部活の練習も、なんだって体力まかせで何とかしてきたんだ。

そのときに必要だったのは……力！ 槍が必要だ！

「……」

ほまれが呆れた目でこちらを見ている。

「不正解だ。君、死ぬぞ」

ダメを出された。これ以上ダメ出しを受けると、大変なことになりそうな気がする……。

「何が必要なのか、私が言っていただろ」

ほまれが言っていたこと？

……えっと、たしか。

「……あつ！ そうか、水か！」

↓ 2 に進む

サバイバルで生きていくため、水と食料が必要ということがわかった。具体的にどうすればいいのか、ほまれが3人にレクチャーをしている。

「この状況下で飲料水を得る方法は、まあ……5つあると思ってほしい」

- 1つ目は植物（生物）から採ること。
- 2つ目は飲めない水をろ過すること。
- 3つ目は海水を蒸留すること。
- 4つ目は水源を見つけること。
- 5つ目は雨水を見つけること。

このうち、1つ目はヤシの実やバナナの木のような、水が採れる植物が見つからないからできない。

竹やツタを切って、その切り口から採取する方法もあるけど、時間がかかりすぎるし、量も少ない。

3つ目の海水を蒸留させる方法は、道具が揃っていないし、火もないからできない。
4人は、何も持っていないから、この方法は無理だ。

今は雨が降っていないから、5つ目も使えない。

残るは2つ目と4つ目……というところで、ほまれは明日香を見た。

「今の私たちにとって、どっちの手段がいいと思う？」

あたしに水を向けてきた！

ろ過と、水源か……。

どっちがいいんだろう？

↓ 飲めない水のろ過がいいと思うなら **6** に進む

↓ 水源を探す方がいいと思うなら **5** に進む

ほまれは、道具も火もないから海水は使えないと言っていた。それなら、道具が必要なる過も難しい。

消去法になるけど、水源を探すのが正解だろ。

「そうだ。この島の大きさなら、どこかに湧き水があるはずだ」

あたしの答えが当たっていたことを確認すると、ほまれは歩き出した。

「私が水を探してこよう」

「あたしも行くぜ。たぶん体力はこの中で一番あるはずだ」

あたしも、ほまれに付いていくことにする。

あとの2人は、あたしたちが持ってきた水を入れるペットボトルを用意することになった。

↓
7に進む

» **飲料水の確保**…小さな島では生活用水の確保が難しくそれが理由で無人島になっている島もたくさんある。とりあえず……なら海水を蒸留したり雨水を集めるのもいいかもしれないが長く生き延びるのにはやはり湧き水を探し出す必要がある。幸い海辺は歩けば海に淡水が流れ出ている場所を見つけやすいのでそこから流れをたどって淡水を手に入れよう。

ろ過の実験ならしたことがある。

学校ではろ紙と漏斗ろうとを使えば、飲める水になっていた。

これならいけるだろ！

「……たしかに、くぼみに溜まった水やピッチャープラントの水は、ろ過すれば使えるな」

……お。いけそうか？

「だけど。私たちには道具がない。海水も使えないからな。煮沸しゃふつさせようにも、火がない。

どんな菌がいるのかわからない汚水を飲むのは最終手段だ」

あ、あれ……。旗色が悪くなってきたぞ？

「不正解だ。君、死ぬぞ」

ダメを出された。

それなら、もう1つが正解か？

↓ダメ出しを受けつつ **5**に進む

↓ダメ出しが2回目なら **32**に進む

4人は、探索中に降ってきた雨に助けられた。

雨をペットボトルに集め、飲料水を確保できたのだ。

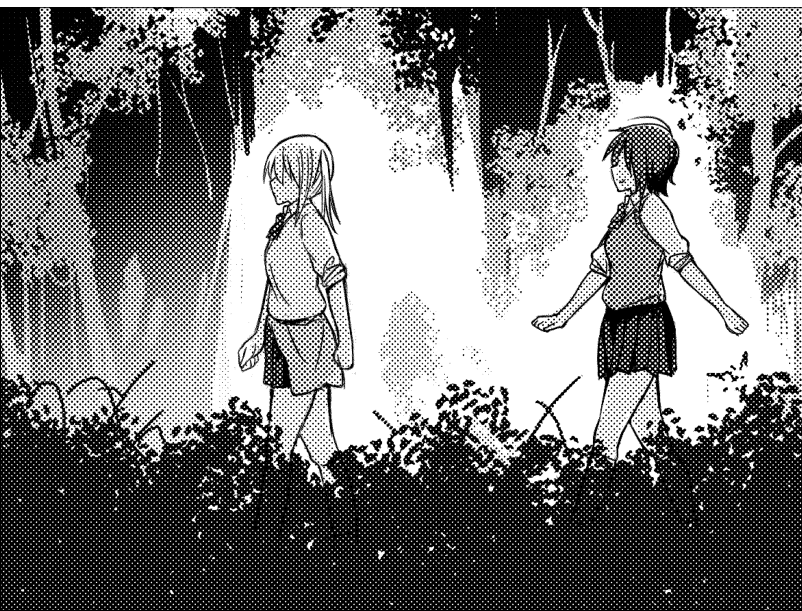
それに、雨が降ったことで、雨水が流れる水場も確保できた。

これでしばらくの間、水は大丈夫だろう。次に必要なのは、食料だ。

あたしとほまれは、山を登っている。

食べられそうなものを探して、片っ端からほまれに鑑定させるつもりだ。

あったまいー！



そう考えた明日香が最初に見つけたのは、キノコだ。

キノコには詳しくないから、それだけ見ても安全かどうかはわからない。

まずは報告をして、ほまれに鑑定させよう。

そう思ったところで、手にセミがくっついた。

振り払おうと考えたが、少し前にほまれがバッタを食べていたことを思い出した。

ほまれに声をかけようと思う。

だけど、どっちを優先して報告しようかな。

食料になりそうなのは……。

↓ 食べるところが少なく見えるセミと思うなら **8**に進む

↓ 見たことがあるキノコと思うなら **9**に進む

「セミを選ぶとは、さすがだな。セミは昆虫食の中でもポピュラーなものだ。素手でも捕獲できるしな」

そう言ってセミを採ったほまれは、セミの頭を手でちぎっていた。

「セミは頭を取った所に羽を動かすための——筋肉が付いているんだ」
筋肉を取り出すと、それを明日香に渡した。

「火を通した方がうまいんだが、エビっぽい味で生でもいけるぞ」

エビと聞いて、食べる気になった。

……よし！

……いや無理!! やっぱセミだよ……。



↓
10に進む

» 昆虫食・セミ…セミは現在でもアジアの一部では食材として扱われている。かつては世界中で食べられていたらしいが安定した供給ができないためすたれてしまったようだ。食材としてのセミだが実はかなりおいしい。羽も食べられるがおいしいわけではないので取り除こう。また火を通す時に腹部が破裂するので小さい穴をあけてから調理した方がいい。香ばしい味に驚くはずだ。

「キノコか……。悪くはないんだけど、小さくてよくわからないな」

爪で傷を入れてみたところ、変色してしまったようだ。

「タマゴテングタケとフクロツルタケのどちらか迷った。色が変わったからフクロツルタケだろう」

「食べられるのか？」

くろうと

「いや、両方猛毒だ。キノコは判断が難しい。玄人でも見分けがつかないものもある」

ほまれにそう言われて、明日香はキノコは難しいかもと思った。

「あっ」

そこで、明日香の腕からセミが飛び立った。

「もったいない。セミを捕まえていたなら、どうしてこっちを先に報告しなかったんだ？」

ほまれは飛び立ったセミを捕まえると、手早く処理を始める。

↓ ダメ出しを受けつつ 8 に進む

↓ ダメ出しが2回目なら 32 に進む



セミだけでは、食料が足りない。

ということ、明日香とほまれは、海へ食料調達に来ていた。

ほまれの話によれば、ここではイボニシという貝を獲ることができらしい。

他にも、ヤドカリやウニが獲れるということを教えてもらった。

ウニはともかく、ヤドカリって、食べるの？

あたしはそう聞こうとしたけど、ほまれは別のことが気になっているようだった。

浜へ出発するとき紫音に「私、好きよ……。サザエのつぼ焼きとか。がんばってね」と告げられた。

すごく期待していたようで、ほまれはその言葉に応えようとしていたようだ。

「サザエやカキのような大型の貝は潜らないと獲れないんだ」

サザエを獲るには深いところへの潜水が必要なようで、ほまれは入念な準備をしている。

「……なあ。サザエと海藻。かいそうどっちがサバイバルの食料に適していると思う？」

準備をしながら、ほまれはあたしにそう聞いてきた。

「ヒント。私は今、素手だ」

そりやそうだよな。あたしたち、何も持たずに漂流してきたんだから。

↓ サザエと思うなら **12**に進む

↓ 海藻と思うなら **11**に進む



明日香は採れた海藻を手に、ほまれに食べられるものかどうか尋ねていた。

緑色や茶系の海藻は食べられるし、栄養価も悪くないという答えが返ってきた。

「たぶん、ワカメだな。今は春じゃないからな。硬いんだ」

明日香は、持っている海藻を触ってみる。ほまれの言った通り、硬い。

「海藻は任せた。素手で採れるから簡単だろう」

「ほまれはどうするんだ？」

「私は……少し探し物をしてくる」

そう言つて、ほまれは潜っていつてしまった。

しばらく経つて、ほまれは手を怪我して戻ってきた。何かで手を切ったのだろうか？ 血が出てゐる。

何を探していたんだ？ ……もしかして、サザエ？

↓
13に進む

あたしは、サザエがあるという場所に軽く潜ってみた。

その結果、暗いし息が続かないし、まともに探すこともできなかった。

「これ、深いところにあるサザエをわざわざ取りに行く必要はないな！」

なんだか、無駄に体力を消耗してしまった気がする。

サザエを探すのは無理だろう。

「それだけじゃない。生ガキを見たことがあるか？」

「テレビやスーパーで見たことがあるような、ないような……」
から カミソリ すると

「殻が剃刀のように鋭いんだ。素手で触れば、当然怪我をする」

そういえば、あたしが見た生ガキも、鋭かったような……。

「……アスカは、海藻を探してくれ」

↓ ダメ出しを受けつつ **11**に進む

↓ ダメ出しが2回目なら **32**に進む

食料も集まってきた。

毎日採りに行けば、しばらくは持つだろう。

これで3の法則のうち、「水」と「食料」はなんとかあった。けれど、「食料」にはまだ不安がある。

何かあったときのために、食料は備蓄しておきたい。

保存食が必要だ。

だけどここに冷蔵庫はない。

どうすればいいだろうか？

あたしはほまれに聞いてみる。

「何か、保存できる食べ物ってないのか？」

「今まで採ってきたものの中にあるぞ。気づかなかったのか？」

「……そう言われてもなあ」

あたしはほまれと2人で採ってきた食料を思い出す。

たしか……。

↓ ↓
ウニなら セミなら
15 **14**
に進む に進む



ちょうど、ほまれが目の前でセミを捕まえたところだった。

「ちょうどいい、こいつで実践してみよう」

ほまれは慣れた手つきでセミの羽をもぎ取ると、空いているペットボトルの中に入れた。

「こうすれば、生かしたまま捕らえておけるから、保存が利くぞ」

余計な知識がまた増えた……。

明日香がそう思っているとは知らずに、ほまれの解説は続く。

「セミを食べるときにはまず羽をむしるところからだな。やってみるか？」

明日香は、楽しそうに解説をしているほまれを見ながら、提案を断った。

↓
16に進む

あたしはウニのことを思い出す。

あれならあまり動かないし、保存にも向いているんじゃないか？

「ウニが向いていると思う！」

「ウニや貝類は傷みやすく、菌が湧きやすいんだ。時間を置くとまずい」
一刀両断だった。

そんなやりとりをしていると、明日香の耳に羽音が聞こえた。

羽音の主はセミで、明日香もその音には慣れてきた。

それからすぐに、明日香は驚いた。

ほまれがあつという間にセミを捕まえて、片羽をむしったからだ。

どうやら、これが正解らしい。

↓ ダメ出しを受けつつ **14**に進む

↓ ダメ出しが2回目なら **32**に進む

保存食を用意できたので、これで当分心配はいらないだろう。

次に、必要なのは……。

あたしがどうしようかと悩んでいると、すっかり回復した睦が木の板と木の棒を持ってきた。

睦が言うには、火板とドリルらしい。

「本当にこれで火なんて起こせるのかよ……」

半信半疑で、ドリルを回す。

「何万年も前の人類はこうやって火を起こしてきました！ 私たちにだってできるはずですよ、アスカさん！」

睦はそう言うけど、手が痛い……。



「キリモミ式か。大変だろう。今日は天気もいいし……道具があるなら、ペットボトルを使うといい」

ドリルを回している明日香の前に現れたほまれが、ペットボトルを差し出した。
これを使えってことか？

↓ ペットボトルと太陽光で発火を起こすなら **17**に進む
↓ 摩擦^{まさつ}で発火を起こすなら **18**に進む

ほまれば、火板のおがくずに向
かって、水の入ったペットボトル
をかざす。

するとペットボトルが凸レンズ
となって日光を収束させた。

収束した日光が火種を作り、枯
れ草を焚きつけると……。

火がついたのだ。

↓
19に進む



」火おこし・キリモミ式…キリモミ式で火を起こすのはたいへんだ。火が起きるより手のひらに水膨れができる方がずっと早い。弓ぎり式に変更したりその他の方法に手段を見直した方がいいと思う。しかし人々がライターで火を起こすようになったのは歴史的にはほんの最近だ。長い間人は摩擦や火打石を使って火を起こしていたのだ。いざという時のためにライターなしで火を起こす練習を一度やっておくのもいいかもしれない。

「うおおおおっ！」

明日香はしばらくの間、ドリルを回し続けた。

数時間ほど回していただろうか。

疲れもピークに達しそう……というところで、火種が現れた。

睦が慌てて枯れ草に火を移す。

苦労したが、なんとか火はついたようだ。

「キリモミ式は、今日みたいに湿度が高いと大変だろう」

「……そうだな」

明日香には、何も言い返す体力は残っていなかった。

↓
19に進む

無事に火はついた。

次に、この火を絶やさないようにしないといけない。

この火は大切だ。

料理をするのにも使うし、水を煮沸するのにも使う。

他にも、獣^{けもの}除けの効果も期待できるだろう。

服を乾かすにも使えるし、暖まるにも火は必要だ。

このように、火はサバイバルにおいて重要なものだということは、よくわかる。

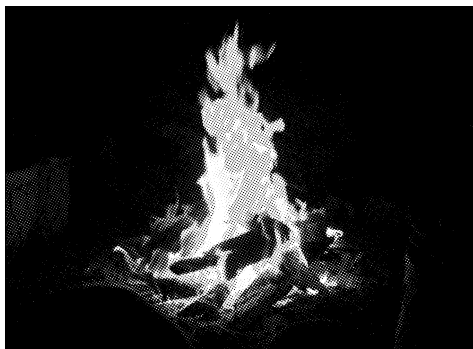
ほまれに火の番を頼まれたあたしは、周囲を見渡す。

さきほどより火の勢いがどんどん弱くなっている気がしたからだ。

でもこのあたりには、燃やせそうなものはない。

何を燃やすといいんだろうか。

探すにしても、このあたりにある燃えるものは……。



木か……？

だけど、このあたりの木は湿っている。しばらくすれば乾くのかもしれないけど……。

本当に燃えるのか？

だとしたら、確実に燃えるものはないか？

例えば……服とか。

それは、とてもナイスなアイデアのように思えた。



時間がかかっても木を探して燃やすなら **20**に進む



急いで着ている服を脱いで燃やすなら **21**に進む

少し出歩いて、たき木を探すことにした。

海岸を少し歩くと、大量の流木が見つかった。

どうやら、この海岸には流木が流れ着くらしい。

これはラッキーだ。

明日香は、何本か乾いた木を見繕うと、急いで火のもとに戻った。

海岸には、大きな丸太のような木も流れ着いていたが、今は必要ないので放っておいた。

乾いた木を燃料に、火は燃え上がる。

この火を見るだけで、明日香は安心できる気がした。

それに、煙も上がっている。もしかしたら、誰かが自分たちを見つけてくれるかもしれない。そんな希望が持てた。

↓
22に進む

服はすぐに燃え尽きてしまった。

自分の服だけでは足りない。他のみんなの服も燃やさないと！

「まずいぞ、ほまれ！ 早く脱いでくれ！」

「まずいのはお前の行動だ！」

戻ってきたほまれに怒られた。

「貴重な服を自分から捨ててどうする！ 野外なのに裸で生活する気か！」

そのとき、強い風が吹いた。

明日香の服を燃やしていた火も、消えてしまった。

「……あつ」



GAME OVER

1に進んで最初からやり直す

無事に火を安定させたら、火のそばで、ほまれが丸太を持ち込んで何かを作っていた。

「火もついたことだし、ここを当分の拠点きょてんにしよう」

「それはわかったけど、何を作っているんだ？」

「屋根付きシェルターだ」

ほまれの説明によれば、風や日差しから自分たちを守るだけでなく、火を守ることもできるといふ。

まだ、骨組みしかできあがっていないらしい。

「……ツタが足りないな。森に探しに行くしかないか。だけど、木も足りないから……」

ほまれはブツブツと何かを言っている。

あたしはそれを見て、今こそほまれを見返すときだと思った。

「あたしに任せろって！ 木なら心当たりがある！」

「本当か？ それなら任せる」

「……」

すんなりと任されたので、驚いた。

あたしのこと、認めてくれてるのか……？

「どうした？」

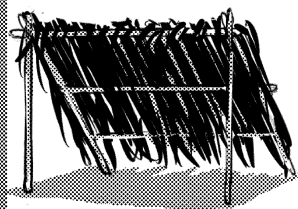
「いや、なんでもない。任せなって！」

それじゃあ、心当たりのあるところまで行くとしようか。
あそこなら、道具がなくても丸太が手に入る！

↓ 森に木を拾いに行く場合は **24** に進む

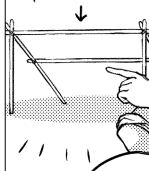
↓ 海岸に木を拾いに行く場合は **23** に進む

シエルター



暑さや寒さ、日射しや風、昆虫
などから身を守る、その名の通り
『防護』のためのテント

骨組みだけ



朝からやってて
まだこの段階
なんだ

君たちがすぐ
休憩するから

むう……

そうだ。この海岸には流木が流れ着いている。その中には丸太もあった。
やりい！ さすがはあたし！

明日香は手ごろな大きさの丸太を一つ抱えて、作りかけのシェルターの前に運ぶ。
「……うん。これだけあればシェルターだけじゃなく、トラップも作れるな」
ほまれは丸太を見て、目を輝かせていた。



25に進む

» **シェルター**……長く自然環境を楽しみたい、または生き延びたいなら睡眠と食事はおろそかにできない。たとえ体力に自信があっても体力がマイナス方向に傾きはじめたら限界はすぐそこだ。地面に直接寝ると体温を地面に奪われどんどん体力を失ってしまうし毒虫に刺されたりしてしまうだろう。ダニやツツガムシからひどい感染症になるケースもある。

森の奥に入ると、ほまれと鉢合わせした。

「もしかして、心当たりってここか？」

あたしは頷いた。ここなら、たくさんの木があるだろ？

「たしかに木はあるが……道具もないから切り出せないぞ。大丈夫か？」

「……あっ！」

そういえば、あたしは木を切り倒す手段を持てなかった。

そうになると、切り倒された丸太を見つけるしかないんだけど……。

「……本当に大丈夫か？ 私は海岸で、ちょうどいい丸太を見かけた気がするんだが……」

心配そうに、ほまれがあたしを見ている。

……やってしまった。

おとなしく、海岸に行こう。

↓ ダメ出しを受けつつ **23**に進む

↓ ダメ出しが2回目なら **32**に進む

毎日、紫音が砂浜にSOSを書いている。

それでも、救助は来ない。

たき木と一緒に、ほまれが生木や松の木を持ってきていた。

「生木は白い煙を、松のヤニは黒い煙を上げるからそれぞれ目立ちやすい」

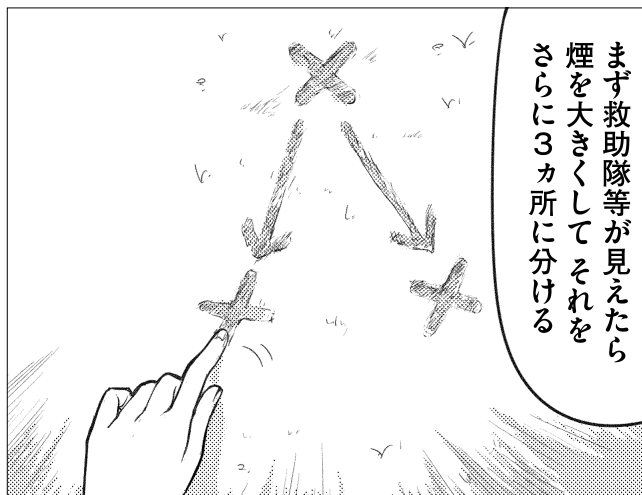
紫音とあたし、2人でほまれのSOSについての話を聞いていた。

「もし救助隊が見えたら、煙を大きくするんだ。そのために煙を3カ所に分ける必要があるんだが……」

ほまれは、地面に図を描く。

「どちらが正解だと思う？」

あたし？ えーっと、この2つだと……。



↓ 3つの煙を正三角形に配置するなら **26**に進む

↓ 海に向かって火を投げるなら **27**に進む

「25メートル間隔で正三角形が理想だ。国際的な救難信号だな」

ほまれは地面に描いた図に丸を付けて、明日香たちに説明をしている。

「あとは鏡を使って、光を届かせる手段もあるな。持っているか？」

鏡はちょうど紫音が持っていた。

紫音はほまれから、鏡の使い方をレクチャーされている。

やり方はわかった。だけど、あたしたち、いつ助かるのかな……。

↓
28に進む



「海に投げて、火を消して……それから？」

ほまれがあたしの方を見ている。

何か間違えただろうか……。

「煙も消えるな。私たちが気付かれることはなくなる」

「あつ、そうか！」

「そうかじゃないわよ！ 私にもそれぐらいわかるわ！」

紫音までこつちをすごい剣幕で見ていた。

「……そ、そこまで言わなくてもいいだろ」

「もういい。後は私としおんでやっておく」

そう言っ、2人で話を始めた。

おーい、あたしはー……？



GAME OVER

1に進んで最初からやり直す

「せっかくだからみんなでモールス信号を習得しないか？」

明日香たち3人に向かって、ほまれがそう提案をした。

「モールス信号は、音や光の長さを変えて意味を持たせることができるんだ」

ほまれは地面に対応表を書いて、あたしたちに教え始めた。

「ツーツー トントントー ツー トントントー、いいですか？」

「そうだ。飲み込みが早いなむつは」
睦はもうわかったみたいだけど、あたしにはさっぱりだ。

【アルファベット&数字 対応表】

A ●—	Q —●—●	6 —●●●●
B —●●●	R ●—●	7 —●●●●
C —●—●	S ●●●	8 —●—●●
D —●●	T —	9 —●—●—
E ●	U ●●—	0 —●—●—●
F ●●—●	V ●●●—	
G —●—●	W ●—●—	
H ●●●●	X —●●—	
I ●●	Y —●—●—	
J ●—●—	Z —●—●●	
K —●—●		
L ●—●●	1 ●—●—●—	
M —●—	2 ●●—●—	
N —●	3 ●●—●—	
O —●—●	4 ●●●—	
P ●—●●	5 ●●●●●	

音の場合
短音(トン)と長音(ツー)の
組み合わせで
アルファベットや数字を
表現する

万国共通信号だから
覚えておいて
損はない



「アスカも、習得しておくといい。たとえば、SOSはどうやって出せばいい？」

「ちょ、ちょっと待て。えーっと……」

「わからないなら、私がヒントを出しますね。このうちの、どちらかです」

↓ 「トントントン ツーツー トントントン」なら **29**に進む

↓ 「トントントントン トンツー ツーツー トントントン ツー トンツートン」

なら **30**に進む

「トントントン ツーツーツ トントントン。だろ？」

「うん。合っている。この間隔で光を飛ばすことができれば……、SOSを正確に伝えられるはずだ」

ふー。助かった。これも、睦がわかりやすい二択を出してくれたおかげだ。

睦の方を見ると、私に向かってこう口を開いた。

「ツートントン ツーツーツ トントントン ツー トンツ

トントントン トントントントン トントン ツーツ トンツ

トントントン トントントントン トントン ツー トン（どういたしまして）」

……ええと、今なんて？

「ふふっ」

「あは……。あはは……」

わからないけど、とりあえず笑っておこう。

↓
31に進む

「トントントントン トンツー ツーツー トントン ツー トンツー トン……
つて、あれ？ 長くないか？」

「HAZURE……。つまり、ハズレだな」

「あっ！」

「すいません。SOSがわかりやすいように、長くしたんですけど……」

「あ、謝らないで！ 間違えた自分がはじめになるから」

「そ、そんな……モールス信号がわからなくても、生きていきます！」

「あ、ああ……やっぱりあたしには無理だ」

「気を確かに持ってください！」

なんだか、すべてが嫌になってきた。

あたし、この無人島でやっていけるのかな……。



GAME OVER

1に進んで最初からやり直す

明日香たちは、水を確保し、食料を手に入れた。これで当分の食料は大丈夫だろう。火も起こしたし、拠点となるシェルターも作れた。

今は、熱した石の上に海で採れたイボニシという巻貝を置いて焼いている。ジュー……という音が、食欲をそそる。

「島に来て初めて人間らしい食べ物に向き合ってる気がする……」
あたしは、興奮しながらイボニシが焼きあがるのを待っている。

「食べ方は普通の巻貝と一緒にだよ。細い枝で刺して、中味を……あっ！」
待ち切れずに、ほまれが試しに取り出した1匹目を食べてやった。

「……うまい」

いける。なんだか、無人島でやっていけるような気がしてきた。

続けて、ほまれがヤドカリを石焼きにし始めた。

……ヤドカリって食べるの？

まだまだ知らないことはたくさんあるな……。



「君、このままだと本当に死ぬぞ」

ほまれはあたしに向かってそう断言した。

そうか、死ぬのか……。

あたしはこのまま、無人島に適応できずに倒れて……。救助に来た人たちが女子高生の無残な死体を見つけて……。そのことがニュースになって……。

ああ、嫌だな……。でも、あたしは死んじゃうからな……。

「おい、しっかりしろ！」

誰かの声が聞こえたので、明日香はゆっくりと目を開けた。

「起きたな。それで、今後についてだが……」

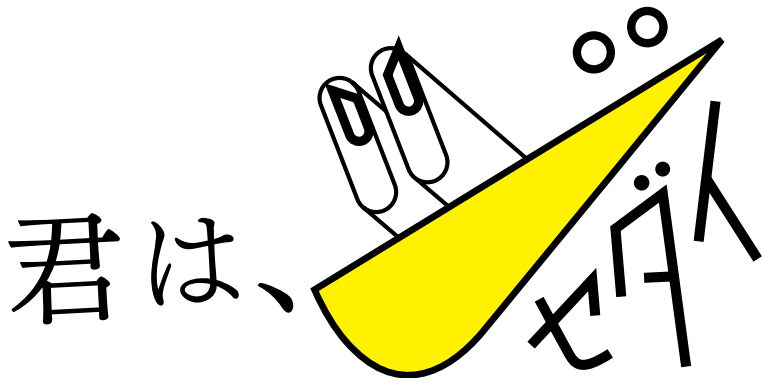
「あれ？　今までのことは……夢、だったのか？」

「……何を言っているんだ？　今から自己紹介をするところだぞ」



GAME OVER

1に進んで最初からやり直す



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!